

わたしの^{しゅうせん}終戦日^び

～^{こえ}声なき^{こえ}声を^{つた}伝えて～

はじめまして。^{なかほど}仲程シゲと^{もう}申します。

きょう わか みな ^{みらい} 未来が^{へいわ}平和でありますようにと^{いの}祈りを^こ込めながら、

むかし^{おきなわ} 沖縄で^お起きた^{せんそう} 戦争について、^{わたし} 私 の^{たいけん} 体験を^{はな}話します。

ほんとう ^{おそ} あんな恐ろしい^{できごと} 出来事は、^{おも} 思い出したくもないけど、

わたし ^{たいけんしゃ} 体験者が^{かた} 語らなければ、^{せんそう} 戦争の^{ざんこく} 残酷さが^{つた} 伝わらないでしょう。

どうか^{れきし} 歴史の^{たん} 単なる^{じじつ} 事実として^{とら} 捉えるのではなく、

あの戦争で^{いのち} 命 を^{うば} 奪われた人たちの^{こえ} 「声なき声」に^{みみ} 耳を^{かたむ} 傾けてください。

おきなわせん ^{とうじ} 沖縄戦の^{さい} 当時、私は15歳でした。

戦争が始まる^{はじ} 前は、^{まえ} きょうだいや^{ともだち} 友達と^{こいし} まりつきや^{つか} 小石を使った

^{いし} 「石ナァグー」という^{あそ} 遊びをして、^{たの} 楽しく^{へいおん} 平穏な^ひ 日々を^す 過ごしていました。

ところが、1944年の夏のことです。

私は、現在の中学1年にあたる国民学校高等科1年でした。

沖縄に10万人の日本兵がやって来ることになり、戦争の足音はすぐそこ

まで忍び寄って来ていました。

我が家は敷地が広がったため、翌1945年の3月頃から、日本軍の部隊の

本部として使われることに。

家の敷地内には大砲の弾が入った木箱がたくさん積まれていきました。

そして、学校の修了式の朝のことです。— 「戦闘開始、第一線突入！」

兵隊たちが、我が家から一斉に飛び出して行きました。

この出動の数日前、沖縄出身の兵隊の砂川さんと仲本さんから家族への
伝言を託されました。

砂川さんからは、

「シゲちゃん、僕たち軍人はきっと戦争で死ぬことになるだろう。

だから戦争が終わっても、もしあなたが無事だったら、僕のことを故郷の

糸満に暮らす家族に伝えてくれ」

と言われ、仲本さんからは

「僕のふるさは玉城の奥武島だ。すまない、シゲちゃん」と言われました。

結局、これが彼らの遺言となってしまいました。

せんそう はげ
戦争が激しくなってきたため、私^{わたし}は家族・親戚^{かぞく しんせき}らとともに防空壕^{ぼうくうごう}へ
ひなん
避難しました。
ドーン！ドーン！

ばくだん はへん
爆弾の破片があちこちにとびちって、人^{ひと}の首^{くび}や手足^{てあし}が切り^き飛ば^とされていきます。
ばくだん お
爆弾が落ちたところは跡形^{あとかた}もなく地形^{ちけい}が変わり、雨^{あめ}が降^ふると、
みず た
たくさんの水溜まり^{みず た}ができました。

あめ
雨^{あめ}あられのように爆弾^{ばくだん}が落ち^おてくる中^{なか}を、私^{わたし}は命^{いのち}がけでイモ^{いも}や野菜^{やさい}を
と
採^とりました。

しょくじ つく けむり で
食事^{しょくじ}を作ると煙^{けむり}が^で出てしまうため、アメリカ軍^{ぐん}の飛行機^{ひこうき}が飛^とばない夜^{よる}に
すいじ
炊事^{すいじ}をしました。

まるでモグラ^{せいかつ}みたいな生活^{せいかつ}でしたよ。

アメリカ軍の攻撃を逃れるために、私たちは壕を出ることにしました。

あまりにも過酷すぎる避難生活に、皆の心と体は限界でした。

何と私たちは、小児マヒで歩けなかった親戚の15歳のシズ子と、

その妹で5歳のトシ子を置き去りにして、逃げてしまったのです。

あの時は毎日が、死の恐怖と隣り合わせだったので、2人のことは

まったく頭にありませんでしたよ。

本当に戦争は人の心まで狂わせる。

今になって「ごめんね」と言っても通じないかもしれないけど、

「本当にごめんなさい」と思い続けています。

そして、今の糸満市のあたりで壕を掘り、身を潜めていたとき、

アメリカ軍の戦車がすぐ目の前までやって来ました。

私たちは何とか息を殺してじっと堪え忍びました。

そのときの「375」という戦車の番号は、今でも目に焼き付いています。

あまりの恐怖に、一緒にいた親せきのおじさんが

「アメリカ兵にやられるより自分たちで死んだ方がましだ」と手榴弾を
手にしました。

すると、私の母がすぐおじさんの手首を握り、

「このかわいい子どもたちは殺させません」と必死に抵抗したのです。

壕には5人の子どもがいました。母が止めなければ、今の私はいません。

その夜のうちに壕を出た私^{わたし}たちは、翌日^{よくじつ}、摩文仁^{まぶに}にたどり着^つきました。

今は沖縄^{いま おきなわ}平和祈念公園^{へいわ きねんこうえん}として整備^{せいび}されて素晴^{すば}らしい場所^{ばしょ}になっていますが、

当時^{とうじ}は死体^{したい}の山^{やま}でした。

水牛^{すいぎゅう}のよう^{なか}にお腹^{ふく}が膨^{ふく}れた人^{ひと}。

真^まっ黒^{くろ}に焦^こげて男女^{だんじょ}の区別^{くべつ}もつかない人。

「兵隊^{へいたい}さん、一発^{いっぱつ}の弾^{たま}で殺^{ころ}してください」

と泣^なきながら手^てを合^あわせる人^{ほんとう}。本^{ほん}当^{とう}に地獄^{じごく}絵^えでした。

その地獄^なの中^{なか}で、私^{わす}は忘^{わす}れることのできない凄^{せい}惨^{さん}な出来事^{できごと}を目^まの当^あたりにしたのです。

そのとき^{ようす}の様子^{えが}を描^えいたのがこの絵^えです。

1人の^{おきなわしゅっしん}沖縄出身の^{わか}若い^{へいたい}兵隊が^{いっぽん}ふんどし一本になって、
^{しゅうい}周囲の^{ひとびと}人々に^よ呼びかけました。

「^{みな}皆さん、この^いままでは^い生きて^いいけない。アメリカ^{ぐん}軍には^た食べ物^{もの}もあるから、
^{おとこ}男は^{いっぽん}ふんどし一本、^{おんな}女は^{にもつ}荷物を^お置いて^{ほりよ}捕虜になりましょう」
と。

すると、2人の日本兵が出てきて、

「こんな馬鹿がいるから、沖縄の戦争は負けるんだ」

と、その男の人の首を斬り飛ばしたのです。

すると、男性の首から血が噴き出しました。

人の首が斬り落とされるのを、目の前で見せつけられた私たちは怖くなって、

慌ててその場から逃げだし、海岸へ降りていきました。

その時、私は左足に怪我を負ってしまいました。

あし ひ かいがん いわば ひっし いどう
足を引きずりながら、海岸の岩場を必死に移動しました。

はは いえ もど い わたし あし け が おも ある
母は「家に戻ろう」と言いますが、私は足の怪我で思うように歩けません。

い きりよく うしな つか き し
もう生きる気力を失い、疲れ切った私は「どうせ死ぬんでしょ。

ひとり は す
このガマで一人で死ぬ」と吐き捨てました。

い おやこ いっしょ しり も あ
すると母は「生きても死んでも親子は一緒よ」と、私のお尻を持ち上げて
くれました。

なん まぶに がけ のぼ
母のおかげで何とか摩文仁の崖をよじ登ることができたのです。

おか っ ま
しかし、丘にたどり着いた私たちを待っていたのは

あた いちめん したい
辺り一面の死体でした。

みな おも
「きつとここで死ぬんだ」— 皆がそう思いました。

ガマに^{もど}戻ると、日本軍の^{にほんぐん}将校階級^{しょうこうかいきゅう}の軍服^{ぐんぷく}を身につけた^み男^{おとこ}の^{ひと}人がいました。

この人が、「アメリカ軍は^{じゅうみん}住民^{ころ}を殺さない。捕虜^{ほりよ}になりましょう」と

^い言ったのです。

「あの、^{くび}首^きを斬り落^おとされた^{せいねん}青年^{せいねん}みたいになったらどうしよう」

「^{ほりよ}捕虜^{わたし}になった^{わたし}私^{わたし}たちに、アメリカ軍は^{ひど}酷い^{ひど}ことをしないでらうか」と

^{おそ}恐^きれる^も気^も持ちもありました。

でも私^{わたし}たちには、これ以上、^{いじょう}戦^{せん}火^かの中^{なか}を逃^にげ回^{まわ}る^{きりよく}気^き力^{りき}も体^{たい}力^{りき}も

^{のこ}残^{のこ}っていませんでした。

ついに、アメリカ軍の^{ほりよ}捕虜^{ほりよ}になることを^{けつい}決意^{けつい}したのです。

その後、ガマを^ご出^でるとすぐにアメリカ軍に^{つか}捕^{つか}まり^{ほご}保^ほ護^ごされました。

こうして、^{わたし}私たちは^{せんそう}戦争で^{いのち}命を^{うしな}失わず、
かろうじて^い生き^{のこ}残ることができたのです。

いま ^ま ^ぶ ^に ^{へい} ^わ ^き ^{ねん} ^{こう} ^{えん} ^{ない}
今、あの摩文仁の平和祈念公園内にある平和の^{いしじ}礎には、

^{まん} ^{にん} ^あ ^ま ^か ^た ^が ^た ^な ^ま ^え ^き ^ざ
24万人余りの方々の名前が刻まれています、

^{たん} ^な ^ま ^え ^も ^じ ^{おも}
単なる名前や文字だと思わないでください。

^{だれ} ^{ひとり} ^し
誰一人、死にたくて死んだわけではありません。

^{しん} ^し ^ま ^い ^め ^ま ^え ^く ^び ^き ^{せい} ^{ねん}
2人の親せきの姉妹、私の目の前で首を斬られた青年をはじめ、

^な ^ま ^え ^き ^ざ ^か ^た ^が ^た ^こ ^え
ここに名前を刻まれた方々の「声なき声」を

^せ ^か ^い ^じ ^{ゅう} ^つ ^た ^し ^め ^い ^い
世界中に伝える使命があるから、私は生きているんです。

^{せん} ^{そう} ^お ^{せん} ^{そう} ^{たい} ^{けん} ^{みな} ^う ^つ
戦争はまだ終わっていません。私の戦争体験を皆さんが受け継ぎ、

^つ ^ぎ ^せ ^{だい} ^し ^{ゅう} ^{せん} ^び
次の世代につなげてください。そのときが私の終戦日です。